

バハイの和と神仏習合

角井 宏

「和」は、バハイの基本的概念である。人類の統合・宗教の統合は、バハイの基本的主張であるが、日本語の「統合」には、会社の吸収合併や・種族の征服のように・不平等かつ、支配的ニュアンスを伴うものが少なくない。それで、これが誤解のもとになったり、布教の妨げになる場合もあるので、注意を要する。

日本仏教の普及過程でも、日本古来の神道との「統合」が興隆の前提となったことがあったが、仏教は、「統合」という言葉を用いず、「神仏習合」と呼んだ。また、両者の一致を強調するため、しばしば、「王法一如」・「神仏一体」とも言った。

奈良の都に開花した、本格的な日本仏教の閻祖が聖徳太子であることに反対する者は少ないと思われる。彼が統一国家形成の指針として示した、十七条の憲法には、第一に「和」、第二に「仏教尊重」、第三に「承詔必謹」を掲げているが、その全体を貫く指導精神は、「王法一如」・「神仏一体」である。

王法の「王」とは、王道即ち君主の規範(則 = のり)であり、「法」とは、仏法の規範(法 = のり)である。王道の厳しさは、太子の息山背大兄(やましる)が、斑鳩(いかに)で彼を殺しに来た蘇我入鹿(そがの)の配下の軍勢と対峙した時、一旦退いて再起を期すべきであるとの建策を退けた。そして、「再起は可能だが、平和を乱し、入鹿との権力争い、即ち私眺のために民を苦しめる悪は犯したくない」と、一族もろとも自殺した故事に示されている。彼は、父の遺訓の継承者であり、実践者として、高名な存在であったから、仏教導入の先駆者であった、祖父蘇我馬子の息であり、山背党だった境部(さか)摩理勢にも、「入鹿の専横を憎むの余り、一族の和を乱し、軍を起こして民を苦しめるな」と諫めて、彼を死に追いやっている。

聖徳太子の遺志を継いで、諸国に国分寺・国分尼寺を作らせ、金光明経と法華経を読ませた聖武天皇の畢生の大事業は、大和国分寺である東大寺に毘盧舎那仏の建造であった。その狙いは、「天照大神仏こそ毘盧舎那仏の化身」という「神仏一体」思想の具象化であった。この「神仏一体」思想は、聖武以後の弘法大師空海の発明であるとの説もあるが、聖武は、大仏建立地を求めたの視察旅行の最初に、伊勢に逗留しており、伊勢神宮寺の建立を発願した。また、後には開眼式以前に東大寺参詣を行った宇佐八幡の顕彰を行うなど、神仏一体化思想を実践していることから見て、精緻な理論化は空海であったかもしれない。しかし、聖武自体に神仏一体化願望があったことは疑いを容れない。

当時八幡は、神仏集合を旗印に掲げた地方の神で、まだ全国に知られたお宮ではなかった。その地方神の宮司大神守女が「東大寺に参詣せよとお告げである」と報告してきたというので、道中天皇の鳳童と同形の乗物使用を許し、沿道諸国に命じて道路清掃させ、百人の警護を整えさせ、詔に八幡大神が夢に諸神を率いて大仏建立を助けるとのお告げがあったと述べ、破格の叙勲を行っている。この比類なきパフォーマンスは、「神仏一体」が、いかに重要な国家的スローガンであったかをよく物語っている。

神仏習合という統合は、仏教主導だけに、神宮寺を作って神々に守らせようとか、崇ったり呪ったりと人に嫌われる神の弱点を仏に頼って善神になろうとか、どちらかといえば、仏教本位ではある。しかし、終局は、仏は神の本地、神は仏の化身という精神界の考え方の問題であって、支配でも征服でもなかったのである。バハイの「統合」も、支配や征服のための実力行使をしなくても越えられる、見せかけの通俗的差別にまどわされずに、一体化総合化努力をしようではないかという精神的な呼びかけなのである。